

令和 3 年 6 月 20 日現在

機関番号：87111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02344

研究課題名(和文)九州に偏在する大陸渡来彫刻の研究

研究課題名(英文)Study of sculptures from China and the Korean Peninsula in Kyushu

研究代表者

井形 進(Igata, Susumu)

九州歴史資料館・学芸調査室・研究員(移行)

研究者番号：60543684

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：薩摩塔等の中国渡来石造物研究を進める中で、朝鮮半島渡来彫刻についても一体的に研究をする必要が感じられ、本研究課題を設定した。日韓関係悪化やコロナウイルス感染拡大のため、朝鮮半島系の彫刻に関しては、大宰府式鬼瓦の考察を深化させたにとどまった。しかし中国系に関しては、薩摩塔の基準作を増加させ、思想的背景の一端まで明らかとし、またその過程で、当初想定していなかった、重源周辺の造形にまで研究が及び、それについても重要な知見をもたらした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

薩摩塔の研究は、文献史学や考古学によって研究が深められてきた日中交流史に、新たな光をもたらすものとして、近年注目を集めている。ただし従来その研究は概ね、個々の作例の制作時期を絞り込む段階に止まっていた。今回個々の作例を結びつつ、信仰主体、さらには思想的背景の一端まで明らかにし得たことは、大陸の信仰と造形の受容や、日中交流史にかかる研究を、新たな段階に引き上げることに資するものである。また、その研究過程で糸口を掴んだ入宋僧周辺の造形のこと、とくに今回は重源の問題に関して、今津誓願寺と本尊を、寧波阿育王寺と結びつつ意義づけたことも大きな成果であり、今後さらに研究を広げる必要があると考えている。

研究成果の概要(英文)：While studying on stone sculptures from China such as the Satsuma-tou, I felt the need to study sculptures from the Korean Peninsula at the same time, so I set this research theme. It was difficult to study sculptures from the Korean Peninsula due to the worsening relations between Japan and South Korea and the spread of coronavirus infection. However, regarding the sculptures that came from China, I deepened my research on the Satsuma-tou and clarified the ideological background. In the process, research extended to the art around Chogen, and a few important facts were clarified about it.

研究分野：日本美術史

キーワード：薩摩塔 宋風獅子 首羅山遺跡 泗州大師 重源 今津誓願寺 大宰府式鬼瓦 畏獣

1. 研究開始当初の背景

平成26年度から29年度にかけて行った、科学研究費(基盤研究C)による「九州に偏在する中国系彫刻についての基礎的研究」(課題番号26370155・研究代表者:井形進)は、日本の美術の歴史において、大陸文物の受容にあたり、言わば濾過装置としての役割を果たした九州という場のあり方や、異文化が接触する境界での美術のあり方について、具体的に考えてゆくために、まずは九州に偏在する中国系彫刻、とくにその明時代以前に遡る古例について、基礎的な資料を調べ、輪郭を把握することを目的としていた。それにあたってはとくに、九州西側でのみ40基程が確認され、基本的に5軀の尊像表現をもち、宋時代から元時代にかけての制作だと考えられる、薩摩塔と称される石塔について、とくに重点的に調査研究を行った。それらは、中国渡来彫刻研究の貴重な基準になるのみならず、文献史学や考古学から研究を深められてきた日中交流史に、新たな光をもたらすとも考えたためである。ただそのような、中国渡来彫刻について研究を進める中で、かねてより島嶼部を含めた九州北西部に偏在することが知られてきた、朝鮮半島系の彫刻についても併せて、双方を一体的に調査研究してゆかなければ、九州、とくにその西側に偏在する中国系彫刻についても明らかにすることはできず、大陸から渡来する彫刻と九州がどのように向き合い、受容し、それが日本の彫刻ないし美術、そして歴史において、どのような意義をもったのかを明らかにすることはできない、と強く実感したことをもって、本研究「九州に偏在する大陸系彫刻についての研究」を行うことにしたものであった。

2. 研究の目的

九州には大陸渡来彫刻が多く遺されている。大陸と向き合う九州は、彼の地の美術作品が流入する窓口であった。それら渡来した美術作品の中で、絵画や工芸品等は、都にまで至ったものも少なくないが、彫刻は多くが九州に留まった。朝鮮半島渡来の彫刻が多く存在していることは、九州ならではの特徴であるとして、かねてより言及されてきた。近年は薩摩塔を中心とする中国渡来石造物、ないしは中国渡来彫刻の研究も進み始め、朝鮮半島製、中国製をあわせ、大陸渡来彫刻が偏在していることが、九州の一つの大きな特徴なのだと言えるようになっていく。とはいえそれらの大陸渡来彫刻について、中国渡来の作例はもちろん、かねてより偏在が意識されてきた朝鮮半島渡来の作例についても、基礎的な資料が十分に調べられているとは到底言えず、その蓄積によって築かれる基盤に根ざした、偏在の背景や意義を具体的に考える試みも、ほとんどなされてこなかった。本研究の目的は、九州に偏在する、石造物に刻まれた仏像を含めた中国渡来の彫刻と、朝鮮半島渡来の彫刻、そしてそれらの影響のもとに出現したことが考えられる作例について、まずは、作品調査を行って調書や写真を蓄積し、そして各々の制作時期を絞り込んで以後の研究の前提を固め、請来の時期について押さえ、それらに基づきながら、九州に偏在する背景について検討しようとしたものである。以て、先述の通り、九州がどのように大陸から渡来した彫刻と向き合い、それが日本の彫刻ないし美術、そして歴史において、どのような意義をもったのか、まずはその一端なりと明らかにしたいと考えたものである。

3. 研究の方法

中国渡来彫刻、朝鮮半島渡来彫刻、あるいはその影響を受けたことが想定される作例について、とにかく現地で実査を重ねて、その作例の調書と写真を調べ、同時に作品にとどまらず、それが所在する場とその歴史や特性についても情報を収集し、集積されたそれらを基盤としながら研究を進め、論文なりの形で随時公にしてゆき、調査研究の成果を広く共有して、研究をさらに上の段階に引き上げるべく意識しつつ研究を進めた。まずは所在情報に基づき、そしてこれまで調査や研究がなされているものは、それを参照しつつあらためて、実査を重ねてゆくことを基本とした。この時、とくに薩摩塔をはじめとする中国渡来石造物に関しては、それらに関する情報集積の中心となっている、久山町教育委員会の江上智恵氏から情報や助言の提供、あるいは考古学的な側面において技術的な支援も受けながら、調査を重ねていった。氏の人脉に負うところは大きく、九州西側のみならず、中国での調査においても、それを活かすことで調査範囲を広げ、調査の精度を高めていったものである。調査を進めながら、折々論文等で研究成果を発表し、研究の協力者や、作例の所在自治体の担当者と現地で現物を前に意見を交わし、研究会やシンポジウムでさまざまな分野の研究者と議論を重ね、意識を拡張したり軌道修正したりしつつ、研究のまとめた報告書の刊行に至った。当初は、むしろ朝鮮半島において、高麗時代の基準的な彫刻の実査を進めて基準を確立し、九州北西部における移入の背景や意義について明らかにすることに重きを置くべく考えていたものの、日韓関係悪化やコロナウイルス感染拡大の影響で全くの不調となり、結局韓国ではまったく実査が行えなかったのは、そもそもその一つの大きな目的の達成を困難としたが、その中であって、中国渡来石造物の調査や研究に一段落をつけることができたこと、またその過程で、最も著名な入宋僧のひとりである重源の、50代における信仰と造形にかかる新たな知見を公にするに至ったことなど、研究が充実

のみならず、当初想定していなかった方向にも広がり始めたことは、成し得なかったことを補って余りあるものだったと考えている。

4. 研究成果

平成26年度から29年度にかけて行った、科学研究費（基盤研究C）による「九州に偏在する中国系彫刻についての基礎的研究」（課題番号26370155・研究代表者：井形進）において設定していた、薩摩塔と宋風獅子の基準に基づいて、薩摩塔や宋風獅子、また、それと細部形状を共有している中国渡来石造物について、制作時期を絞り込み、基準的作例の数を飛躍的に増やしたことが、研究深化の大きな力となった。中国渡来石造物は、福岡平野周辺、平戸周辺、薩摩周辺に集中しており、それらの地はかつて要地であったと考えられ、いま研究を進める上でも要地であるわけであるが、それぞれの地における重要作例の中に、とくに福岡平野周辺においては少なからぬ数の、基準的作例を設けることができた。基準的作例については、これからもさらに増やしてゆけそうである。そして基準的作例を要とし、それらを網の目のように結びながら、史資料の検討を並行して行いつつ、とくに中心的な存在である薩摩塔については、中国人の海商たちが信仰主体であること、薩摩塔がある場所は、居住地である場合のみならず、いずれにせよ彼らにとって大切な意味をもつ場であること等々、その背景について明らかにすることができた。また思想的背景について、神仙思想など仏教以外の信仰との関係も想定すべきであることや、仏教と一口に言っても例えば入宋僧や渡来宋のそれとはやや異なり、庶民信仰としてのそれとの関係に言及するに至ったことも大きい。今は泗州大師すなわち僧伽との関係なども強く意識している。

九州の中国渡来石造物に関しては、これまで十分な言及ができていなかった、畿内の中国ゆかりの石造物について、その位置づけや意義について考えながら、それらとの比較検討を行うことも始めている。具体的な作例としては、京都泉涌寺の俊苧の無縫塔、奈良東大寺南大門の石造獅子、三重新大仏寺の石造須弥座などである。現段階での見通しについては、本研究の報告書によっていただきたいが、いずれにせよ、九州西側、京都、奈良と三重、それぞれの場において中国渡来なり中国ゆかりの石造物のあり方、あるいは大陸への意識は異なっており、そのような環境の形成は、そもそものそれぞれの場の環境と共に、要となった人物の志向に拠るところが大きいことも想定される。さまざまなあり方を各々分析してそれらを組み上げてゆくことで、これから、日本における大陸渡来文物受容の様相を、立体的に明らかにしてゆくことが、可能となるのではないかと思う。引き続き検討を深めてゆきたい。またそのような中で、薩摩塔と密接な関係にありながら、異風こそあれ聖域を護る守護獣として、中国人海商以外にも共有される存在として指摘してきた宋風獅子の新出作例が、瀬戸内海航路の要衝である室津から確認されたことも、大きな成果であった。薩摩塔と宋風獅子の対比的な検討からも、新たな世界が見えてきそうであるし、海路沿いに東に向かう宋風獅子そのものの検討も、大陸渡来文物の日本における受容の実像について考察する上で、意義あることだと思われる。いずれにせよ、今回の研究の成果について詳しくは、後述する発表論文や報告書によっていただきたい。

なお、朝鮮半島渡来彫刻については、先述の通りに主眼を置いていた韓国国内での調査が不調となったために、今回の研究は方向転換をして中国渡来彫刻の問題について主に検討を深め、薩摩塔に関しては一応の小結に至り、そしてまた、当初は取り組みを想定していなかった、九州での入宋僧周辺における造形活動、とくに重源の50代における信仰と造形に光を当て、今津誓願寺とその本尊を、寧波の阿育王寺舍利殿建設との関わりのもとに意義づけるなどの新知見を公にして、新しい研究を始める糸口をつかんだものであった。しかし朝鮮半島系の彫刻についても、高麗時代の基準的な彫刻の実査を進めて基準を確立し、九州北西部における移入の背景や意義について考えることこそできなかったものの、研究を始めたり深化させたりしたこともあるので、ここで加えてそれらについて述べておきたい。朝鮮半島系の彫刻については、制作の時期について議論のある、山口の菩提寺山石仏の確認調査や、大宰府式鬼瓦についての検討、とくにその制作の様相、機能、鬼面の「鬼」についての考察を進めた。両者はともに、統一新羅時代の作例との関係に言及されることがある。ただし前者については、近代の制作との見解もあり、今後、造形と場とにあらためて注目することで、位置づけを試みてみたい。後者の大宰府式鬼瓦については、統一新羅の影響は首肯できるものの、それは一つの要素に過ぎないことを明らかにした上で、これが大宰府のあり方や機能を象徴する、端的には「以示威武」とも言うべき存在であること、そして鬼面の「鬼」は平城宮式の鬼瓦のそれと共通するものであって、それはおそらくは、中国で畏獣と総称される辟邪の鬼神の類であること等を指摘した。この大宰府式鬼瓦の検討は、大宰府史跡発掘50周年を契機として、それとの連動も意識しながら行ったものである。積み重ねられてきた大宰府研究や、現在の多分野にわたる研究者との研究交流、九州における彫刻史研究の深化を背景に進めた検討を通して、古代における大陸渡来彫刻ないし美術の受容において、大宰府が果たした役割の大きさや個性的な機能が、その背景には浮かび上がってきていると考えている。この方向の研究も今後あらためて深化させたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 井形進	4. 巻 0
2. 論文標題 九州の中国渡来石造物	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 九州の中世 神仏と祈りの情景（高志書院）	6. 最初と最後の頁 106-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井形進	4. 巻 496
2. 論文標題 背振山地北側の古仏と背景	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西日本文化	6. 最初と最後の頁 26-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井形進	4. 巻 46
2. 論文標題 今津誓願寺の阿弥陀如来坐像 栄西と重源所縁の創建期本尊として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 九州歴史資料館研究論集	6. 最初と最後の頁 57-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井形進	4. 巻 1
2. 論文標題 夜明山朝日寺の仏像 神子栄尊像と三躯の観音像を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 特別展図録『久留米 その歴史と文化』	6. 最初と最後の頁 102-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井形進	4. 巻 45
2. 論文標題 薩摩川辺の水元神社の薩摩塔	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 九州歴史資料館研究論集	6. 最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井形進	4. 巻 1
2. 論文標題 大宰府式鬼瓦考 式Aを中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『大宰府の研究』(高志書院)	6. 最初と最後の頁 561-575
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井形進	4. 巻 44
2. 論文標題 筥崎宮周辺の中国渡来石造物 恵光院の作例を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『九州歴史資料館研究論集』	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 井形進
2. 発表標題 今津誓願寺の阿弥陀如来坐像 創建期本尊との関わりを中心に
3. 学会等名 美術史学会西支部例会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 井形 進	4. 発行年 2019年
2. 出版社 海鳥社	5. 総ページ数 226
3. 書名 九州仏像史入門	

1. 著者名 井形進	4. 発行年 2021年
2. 出版社 九州歴史資料館	5. 総ページ数 106
3. 書名 九州に偏在する大陸系彫刻の研究 薩摩塔を中心とする石造物を主として	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------